

一般演題

1 臨床動作法によるリラクゼーション反応の検討 ー心理反応評価尺度開発の試みー

○桑島 隆二¹⁾・榊原 雅人²⁾・吉川 吉美²⁾

1) 愛知学院大学心身科学研究科

2) 愛知学院大学心身科学部

臨床動作法とは、成瀬悟策によって開発された心理療法で「動作」を通して心理的問題を改善する技法である。臨床動作法には「リラクゼーション課題」、「軸づくり課題」などの代表的な課題があり、自らの身体感覚を実感しながら動作を変えていく工夫や試行錯誤によってリラクゼーションや活気などの心理反応が引き起こされることが知られている。本研究は動作法によって引き起こされる心理的反応を簡便に評価する尺度を開発することを目的とした。

「リラクゼーション課題」と「軸づくり課題」によって引き起こされる心理的反応について、リラクゼーション反応、活気、身体への内的な注意などを想定した評価項目を準備し、学生 284 名に対して質問紙調査を実施した。得られたデータに因子分析（主因子法バリマックス回転）を施したところ、3 因子構造が認められ、これらを「安心・安静」、「活気」、「身体への気づき」因子と命名した。次に、リラクゼーション課題を実施する条件、軸づくり課題を実施する条件を設定し、これらの3 因子から成る質問項目（心理反応評価尺度）、POMS 下位尺度（活気）、BAS（身体気づき尺度）を実施した。その結果、「安心・安静」、「活気」、「身体への気づき」得点は既存の尺度得点との間で高い相関係数を示した。また、各動作課題における変化は、リラクゼーション課題では「安心・安静」得点が主に大きく増加し、一方で軸づくり課題においては「意欲・活気」得点が主に大きな増加を示した。この際、身体への気づき因子の得点はどちらの課題においても有意に増加した。

結果に示されたように、各々の動作課題によって引き起こされた「安心・安静」、「活気」、「身体への気づき」の反応には併存的妥当性が確認されことから、心理反応評価尺度はこのような動作法課題の実施によって引き起こされる心理的反応を適切に評価できる可能性が示された。臨床動作法においては、近年、身体への気づきを伴ったリラクゼーション反応の役割が重要であることが指摘されており、今後、この技法におけるリラクゼーション反応について生理指標を用いた検討を行う予定である。

一般演題

2 皮膚電気活動を用いたスーツビスポーク時の顧客の心理活動計測

- 張 帆¹⁾・杉本 匡史²⁾・山崎 陽一²⁾・宮井 彩希¹⁾・小幡 浩大¹⁾
長田 典子²⁾
1) 関西学院大学理工学研究科
2) 関西学院大学理工学部

【目的】

顧客の満足度を向上し、購買を達成するため、販売員は顧客の振る舞いから心的活動を推測しながら自分の販売行動を調整する。しかし、経験の浅い販売員はその心的状態を的確に把握ことは困難である。顧客の状態を制御入力としたフィードバックによるトレーニングを繰り返すことにより、販売員は顧客の心的状態を想定し、販売行動をとれるようになると考えられる。本研究は、以上のシステム開発の予備研究として、スーツビスポーク時の顧客心理活動について皮膚電気活動(GSR)を用いて検討した。

【方法】

販売現場で顧客4名を対象とし、スーツビスポーク時のGSRと動画で記録した。

【結果】

販売プロセスのキーポイントの幾つかにおいてGSR反応が確認できた。特にオプションの選択に「葛藤」、オプションを「決定」、または自分に着た時の様子を「イメージ」する時に、GSR反応が明確に見られることが分かった。

【考察】

実験の結果、GSRは販売時の心的活動を測定できることが示唆された。GSRは基本的に覚醒度と対応するが、時系列的・空間的な情報を利用することで、感情価を推定できる可能性も示されている。今後は感情価の推定を検討する予定である。

一般演題

3 心拍変動指標の解釈と利活用における課題について

○大須賀 美恵子

大阪工業大学ロボティクス&デザイン工学部

心拍変動指標は計測や解析の簡便さから、自律神経の活性度やバランス、ストレス度の指標として用いられている。特に近年、スマートウォッチやリストバンドによる心拍計測、スマートフォンのカメラを用いた脈拍計測が日常的に行えるようになり、これらを用いたストレス診断などのアプリケーションが出回っている。そもそも、心拍変動の高周波成分(HF)が副交感神経指標、低周波数成分(LF)が交感神経指標、あるいは、LF/HFが副交感系と交感系指標と言われているが、これらは呼吸や姿勢などが統制されているということが前提である。LFは深呼吸やため息、発話でも増大するがそれらを交感系賦活とするのは問題がある。さらに先に挙げた簡易計測では指標値算出のアルゴリズム、特に計測不備の際の処理がブラックボックスになっているという問題がある。外れ値を取り除かずに指標値を算出し変動指標値が大きくなり出たり、逆に外れ値を取り除いて補間したために変動指標値が小さくなり出たりしていると推察される。心拍変動指標の利用が一時的なブームに終わらず、有効に活用されることを期待して、モデルを用いた指標の解釈や計測・解析における注意、課題について述べる。